

森立之「八素説」をめぐって

——『素問』の巻数についての疑問——

丸山敏秋

一、はじめに

江戸時代末期、次々と輸入紹介される西洋医学に多くの医家が目を向けつつあったこの時代に、ひたすら伝統的中国医学の研究に励み、優れた業績を残すグループがあった。江戸の多紀家が主宰する医学館（躰寿館）を中心としたそのグループは、考証学的手法を用いた綿密な医書研究に特色があることから、考証学派と呼ばれる。

本稿でとりあげる森立之は、彼ら考証学派における最後の一人として位置づけることができる。幕末から明治初年という激動の世を駆け抜けた立之の生涯は、生来の奇癖も絡んで、実に波乱に富んだものであった。彼は生真面目な学者肌の人物ではなかったが、考証学派の先輩達に立ち交じり、数多くの著作を残した。しかし時代が時代であっただけに、刊行されたものはわずかしかない。また彼は当時の有数な蔵書家として書誌学上の知名度は高いものの、業績である古典の注釈・考証は先輩諸氏の遺業を受け継いだものにすぎず、「立之自身が研鑽を積んだ業績は極めて乏しい」とも言われている。だがこの評価はあまりに厳しい一面的な見方と言わねばならない。実際に彼の注釈等を読んでみると、優れて正鵠を得た解釈や卓越した推理、ユニークな見解などを随所に見出すことができるからである。ここにとりあげる「八素説」もその一つと言えよう。それは後に述べるように、『素問』についてのユニークな推説と評すべきものであろうが、そこか

ら筆者は『素問』に関する一つの重要な示唆を得ることができた。本稿はその「八素説」の紹介を通して立之の発想の一端を窺うと同時に、筆者が示唆を得た『素問』の問題点を明らかにすることを期したものである。

「八素説」の内容を紹介するに先立ち、森立之の生涯・人物・業績等について、概略なりとも触れておく必要がある。彼の独特な発想は、その奔放な生きざまと切り離しては考えられないからである。⁽²⁾

二、森立之略伝

森立之、字は立夫、号は枳園、文化四（一八〇七）年十一月、江戸に生まれた。医を業とする森家は、鍼術で盛名があった京都の森宗順（宗純、一六二六年没）に始まる。三代の時に江戸へ移り、六代の恭忠に至って福山藩主阿部家に仕えることとなった。恭忠は立之の祖父に当たる。養子であった父親が放蕩のため離縁され、祖父の養嗣となった立之は、文政四（一八二二）年、十五歳で家督を継いだ。十一歳の時、立之は当時わずか十三歳の渋江抽斎に弟子入りする。師と頼むにこの時の抽斎は余りに若い、二人の師友としての交わりは深く永く続き、後には共同で『経籍訪古志』の編纂に携わることにもなった。十六歳頃には伊沢蘭軒に就いて学び、狩谷掖斎にも師事。恵まれた環境の中で医学・考証学・書誌学・文学等を修めた立之は、そのこまめな性格が師や先輩から愛されたらしい。天保四（一八三三）年、二十七歳で結婚。恩師掖斎を喪った同六年には、子の約之が生まれる。約之も父に従って医学・考証学を修めた。

書籍を愛し、学問に情熱を傾ける反面、立之は生来大変な遊び好きで、奇癖・奇行が多かった。それが大いに祟り、ある事件を契機として天保八（一八三七）年以後の十二年間、立之は受難の浪人生活を送ることになる。ここで彼の人となりについて触れておこう。およそ立之の生涯は酒色と芝居を抜きにして語ることはできない。殊にその芝居好みは病的とさえ言える。抽斎も「劇神仙」の号を襲うほどの芝居好きであったが、到底立之の比ではなかった。小柄で美男子であった彼は素人芝居では常に女形を演じ、声色が巧みで、七代目団十郎にはとりわけ執心した。浪人中は役者に身をやつした

とさえ伝えられ、晩年も芝居について語らぬ日は一日としてなかつたという。また非常な音痴ではあつたが元来多才であれこれと芸事に手を出し、詩歌も好んで作つた。晩年は狂歌や俳諧を得意とし、多くの作品が残っている。

立之が筆名めであつたことはその著作を通じて充分に知り得るが、同時に恐ろしいほどの口達者でもあつた。戯れた別号を多く用いた中に「二端道人」とあるのは、筆端と舌端とを以て自認した号に他ならない。さらに平素臆病で夜は一人で休めず、沢庵漬を忌み、蛭蝮なまくじを怖がるといった奇癖もあつた。後に述べるように彼は非常な蔵書家となるのであるが、それには一度書物を借りたら返すことを知らないという図々しさが大いに手伝っている。立之の我儘勝手な性格は、妻や息子にも同様に備わっていたらしい。

天保八年、三十一歳の立之は馴染みを重ねた遊女との道行が発覚し、祖父の代より食んでいた主家(阿部家)の禄を失つた。一説には立之が舞台に出ているところを阿部家の女中に発見されたことによるともいう。江戸に居たたまれなくなつた彼は家族を伴つて相模国へ夜逃げし、落魄の放浪生活が始まつた。その間の思い出は後にまとめて出版された『遊相医話』の中に詳しい。やがて大磯に腰を落ちつけてからは医業も流行り、時々江戸に出ては抽斎の家に泊まるようになった。

嘉永元(一八四八)年、友人達の助力もあつて長年の勘気が許された立之は、神田お玉ヶ池の新居に移る。その前年、江戸医学館において多紀元堅が督事する宋本『千金方』の校刻が、安政元(一八五四)年には古写本『医心方』の校刻事業が行われ、立之も助教を命ぜられた。この頃は彼にとつても最も充実した時期と言えよう。医学館講師の就任、狩谷桜齋が究めていた『神農本草経』の校刻完成、『経籍訪古志』の編纂、『蘭軒医談』の刊行、『本草経攷注』の完成等々、意欲的に仕事を続けた。立之は落魄中に山野で実地採集した経験も手伝つて特に本草に詳しく、医学館では主に本草学の講義を担当した。そして安政五(一八五〇)年十二月には將軍に謁見し、御目見え医師の列に加わるまでになつたのである。

しかし時代は大きな転換期にさしかかつていた。慶応四(一八六八)年、幕府が覆り明治と改元されるこの年の六月、江戸医学館が廃館となる。立之は住み慣れた江戸を離れ、遠く福山へ居を移した。やがて悲しみの明治四年を迎える。こ

の年の正月に『伊呂波字源考』が成ったものの、六月に最愛の子約之が急死、続いて十一月には妻と死別した。翌年、六十五歳の立之は一人漂然と上京。彼を支えてくれた師友の多くも既に世を去っている。文部省医学校の編書課や朝野新聞などを転々とした末、大蔵省印刷局に落ちつく。その後、和漢方医を結集して「温知社」を組織したりするが、印刷局を罷役となった明治十八年、失意のうちに淋しく没す。時は十二月六日、享年七十九歳であった。

最後に立之の蔵書と業績について触れておきたい。森家の蔵書はさほど多くはなかったらしいが、立之は狩谷・伊沢・渋江など諸先輩の旧蔵書を手し、非常な蔵書家となった。その中には善本も数多く、幾度かの火災にも焼失を免れたが、立之はしばしば蔵書を売って生活費に代えることをした。特に『日本訪書志』の著者として知られる楊守敬が滞日した間、かなりの善本を彼に売却した。他人の蔵書を隠匿した上に売却までしたとの批難を受けても己むを得ない立之の行為であるが、皮肉なことにその行為によって今日まで散佚を免れた善本も、実際に少なくはないのである。³⁾

考証学派の最後の生き残りとして、立之は先輩諸氏の遺業を継承した。『神農本草經』の復原校刻や、『素問』『傷寒論』『神農本草經』など中国医学における基本典籍の攷注シリーズは、彼の代表的な業績と言えよう。ただ残念なことに、立之の著作はほとんどが未刊の稿本であり、一体どれだけの著作があるかも正確には判っていない。記録に残っている著作名をここにあげるのは略すが、現在それらはあちこちに散じ、行く方知れずのものも少なくないのである。「要するに彼は真面目な研究者でも学儒でもなかった。むしろ文字を解した一種愛すべき俗医であった」とは川瀬一馬氏の立之評である。だがそれは同氏の先の言と同様、余りに厳しすぎよう。立之の研究がほとんど為されていない現在、彼の業績に対する評価はこれからの課題なのである。

三、「八素説」の内容

森立之の大著『素問攷注』巻第一の序の部分の注に、次のような内容の一文が見える。

『左伝』に上古の典籍である「八索・九丘」という名が見える。この「八索」の「索」は「素」の字の誤りで「八素」とするのが正しい。「八素」とは今の『素問』八巻を指すのである。(抄訳)

そしてこの注文を「私(立之)は別に「八素攷」を著わしているが、繁細であるためここには詳録しない」と結んでいる。ここに言う「八素攷」とは「枳園叢攷」(自筆稿本)⁽⁵⁾所載の「八素説」と題する論考のことである。わずか三葉半(半葉は二十十字行)、割注も含め一四〇〇字余りの小論であるが、筆者はこの「八素説」に非常な興味を覚えた。以下にその内容を大きく前後二段に分け、立之の論述に従って注解を加えながら紹介してゆこう。

(1) 「八索」と「八素」

立之はまず『左伝』昭公十二年に見える次の文をあげる。

左史倚相趨過。王曰、是良史也。子善親之、是能讀三墳五典八索九丘。(左史倚相趨り過ぐ。王曰く「是れ良史なり。子善く之を視よ。是れ能く三墳五典八索九丘を讀めり」と。)

次いでこの部分の「三墳・五典・八索・九丘」に対する諸注の中から「八索」に関するものを選んで示す。

- (1) 杜預⁽⁷⁾……(三墳く九丘は)皆古書なり。
- (2) 『經典釈文』(以下『釈文』と略記)……「索」は所白の反。本また「素」に作る。
- (3) 賈逵⁽⁸⁾……「八索」は八王の法なり。
- (4) 延篤の引く張平子……「八索」は『周礼』の八議の刑なり。「索」は空、空に之を設く。
- (5) 馬融……「八索」は八卦なり。

以上が『左伝』の記載についてであり、続いて同じく「八索」を解した孔安国(立之は「某氏」とする)⁽¹⁰⁾の古文『尚書』序の文句とその部分の注を引く。やや長いが全文を次に記しておく。

(孔安国の序) 八卦之説、謂之八索。求其義也。春秋左氏伝曰、楚左史倚相能讀三墳五典八索九丘。即謂上世帝王遺書

也。(八卦の説、之を八索と謂う。求、其の義なり。『春秋左氏伝』に、「楚の左史倚相能く三墳・五典・八索・九丘を読めり」と曰う。即ち上世の帝王の遺書なり。)

(1) 『釈文』……「索」は所白の反、求なり。徐音は素。本或いは「素」に作る。

(2) 『尚書正義』……其の八卦の事義を論ずるの説、其の書之を「八索」と謂う。「素」とは求索を謂う。また搜索なり。『易』の八卦を以て主と為す。故に『易』に曰く「八卦列を成して、象其の中に在り。因つて之を重ね、又其の中に在り」と。また曰く「八卦相盪す」と。是れ六十四卦・三百八十四爻、皆八卦より出ず。八卦に就きて其の理を求むれば、萬有一千五百二十策、天下の事得らる。故に之を「索」と謂う。一索再索には非ざるのみ。此の「索」『左伝』にまた或いは之を「素」と謂う。説同じからざる有り。皆後人其の真理を失い、妄りに穿鑿するのみ。

このように、立之は「八索」の言葉が見える『左伝』の文句と孔安国『尚書』序を含めた代表的な解釈を列挙することから筆を起こした。

上古の遺書として並び称される「三墳・五典・八索・九丘」が、それぞれ何を指すのかについては古來諸説がある(表参照)。「八索」についてだけでも前述の如く、八王の法とするもの(賈逵)、『周礼』所載の罪が減免される八つの裁判上の恩典(八議の刑)と見なすもの(張平子)、八卦の説とするもの(馬融・孔安国)などさまざまであった。中国伝統医学の原典の一つである『素問』も、その大部分が黄帝と岐伯等臣下との問答より成っていることから、三墳の書(この場合、伏羲・神農・黄帝の遺書)と見なされていた時代があった。もとよりそれは一種の伝説にすぎず、比較的早くから批判が提示されている。⁽¹⁵⁾

立之も「素問」が黄帝の遺書だとは言っていない。彼が目をつけたのは「八索」の方であった。そのことを論ずる前に、彼は「索」と「素」の文字が中国古典の中で誤用されている例を説明する。上記の『釈文』には「索」を「素」に作

	三 墳	五 典	八 索	九 丘
孔安国『尚書』 序	伏羲・神農・黃 帝の書	少昊・顓頊・高 辛・唐・虞の書	八卦の説	九州の志
賈 逵	三王の書	五帝の典	八王の法	九州亡国の戒
張平子	三 礼	五帝の常道	『周礼』八議の 刑	『周礼』の九 刑
馬 融	三 氣	五 行	八 卦	九州の数
『周礼』春官 外史・鄭玄注	三王の書	五帝の書		
『左氏会箋』	三 皇	五 帝	八 卦	九 疇

る別本の存在が指摘されている。また『礼記』中庸に「子曰素隠行怪」とある句の「素隠」の字を、『漢書』芸文志（以下『漢志』と略記）の神遷家の項では「索隠」に作って引用している。医書においても、『医心方』卷十六の八治悪脈腫方Ⅴ第九に『小品方』を引いて「瘰癧畏寒」とあるのが、『千金方』では「瘰」の字が「索」に作られている⁽¹⁶⁾。また『素問』八六節藏象論Ⅴ第九の王冰注に『八素經』序を引いているが、新校正注によると「素」を「索」に作る別本があるという。他の類例は省略するが、このように「素」と「索」とは古典の中でしばしば誤って用いられているのである。そこで立之は言う。

これらによれば「八索」とはすなわち「八素」であり、「八素」が本字で「八索」は誤字なのである。「素」と「索」とは音が近く、字形もよく似ていて誤りやすい。故に『左伝』の一本では誤って「八索」としてしまった。某氏（孔安国）もこの誤った『左伝』の本文に基づき、字（この場合は「素」）に従って説を立て「求其義也」と言っている。以後の注釈家もみなそれに倣うばかりで何ら異論がない。「八索」は「八素」であることを知らないのである。

以上が「八素説」前段の内容である。「素」と「索」の字が古典の中で誤用される点があるのは、立之が示した例から充分に認め得る。確かに両字は形が似ており、音についても、藤堂明保氏が索(sak)と素(su)を同一の単語家族に分類しているように⁽¹⁷⁾極めて近い。従って両者が筆写の際に誤って伝えられる可能性は極めて高いと言えよう。また語義も相通するところがあり、藤堂氏は、「素」の原義

は一筋ずつ分かれた繊維、「素」は一筋ずつ別になつた糸を意味する同系の言葉と見なしている。⁽¹⁷⁾しかしそれだからといって『左伝』所載の「八索」を「八素」の誤りと断定することは些か早計であらう。「八索」の名は『左伝』に最も早く見え、孔安国の序や他の注も『左伝』の文字に従っているため、それが誤りであれば影響は大きい。だが「八素」が「八素」でなければならぬ根拠を、立之はこの段階では何も述べてはいないのである。付言であるが、「八素」の「素」を「素」と読み取っている者は立之以外にもいた。彼は本説の末尾に一字落として両字が相似する用例をさらに七行ばかり補っているが、その中で後漢の劉熙『釈名』八釈典芸の一節を引いている。劉熙は「八索」の「素」は「素」の意味であり、孔子のような聖人にはあるが王ではない「素王」の八つの法と解しているのであるが、それは「素」を「素」の意味と捉えているにすぎないと立之は見ている。次に述べるように、彼にとって「素」はあくまで「素」でなければならなかつたのである。

(2) 「八素」と『素問』

『左伝』が伝える上古の遺書「八索」が「八素」の誤りであるとすれば、その「八素」とは一体何を指すのであろうか。もとより立之は従来の解釈を採らうとはしない。彼は「八素」を「黄帝素問」八巻のことだと考えたのである。その根拠となるべきものとしていくつかの事柄をあげている。列挙してみよう。

(1) 藤原佐世『日本国見在書目録』(以下『見在書目録』と略記)に「八素八卷、董邕注」とある。

(2) 『医心方』巻二八人神所在法ノ第八に引用する華佗の言「十二日神在髮際」の注に、「八素」注の「髮際在上星下一寸毛内之」なる言葉を引いている。

(3) 同書巻二八鍼例法ノ第五に引く徳貞常の言に「載燔鍼法、董邕曰…」の百一九六字を載せている。これは「八素」の旧注が僅かに残っているものである。

(4) 王冰の『素問』注に『八素経』の序を引く。

(5) 『太平御覽』に『八素真經』を引く。

(6) 『道藏目錄』によると、洞玄部王訣類に『上清太上八素真經』一卷が、正一部に『洞真太上八素真經精要三景妙經』一卷、『洞真太一八素真經修習功業妙訣』一卷など、七種の「八素」の名を付した書名がある。

これらの事柄について検討してみよう。(1)の『見在書目錄』には医方家の部に確かに『八素』なる書名があり、八卷と記されている。注釈者の董暹なる人物は未詳。(2)(3)も『八素』の注釈書が日本に伝わっていたことを証明する。その『八素』とは詳しい内容が不明なため確証はないが、(4)の王冰が『素問』八六節藏象編Ⅴの中で引く『八素經』と恐らく同一の医書であろう。王冰はそこで序文の「天師對黃帝曰、我于僦貸季理色脈已三世矣、言可知乎」なる文句を引いている。天師とは『莊子』徐無鬼篇では黃帝に教示した喪城の童子の称とされているが、ここでは岐伯を指す。

何故なら宋の羅泌が著わした『路史』の注文中に、王冰が引く『八素經』序とほとんど一致した文句が見え、そこでは「天師岐伯對黃帝曰……」と書かれているからである。⁽¹⁸⁾『八素』及び王冰の引く『八素經』が今に伝わらない以上、それを直ちに『素問』と見なすことはできないが、少なくとも『八素經』は黃帝と岐伯との問答より成ることが予想されることから、何らかの關係があるとは考えられる。ところが(5)の『太平御覽』が引く『八素真經』は(2)～(4)の場合と同傾向が異なる。『八素真經』は卷六六〇の道部二八真人上Ⅴと、卷六七九の道部二一八伝授下Ⅴに見える。二つとも同文で「若精勤皆當書以葉簡、刻以瓊文、位為上清左真公」とあり、内容は判然としないが、少なくとも医書の記述と呼べるものではない。また『太平御覽』には『八素經』なる書の引用が、①卷六六八の道部一〇八養生Ⅴ、②卷六六九の道部一一八服餌Ⅴ上、③卷六七三の道部一五八仙經下Ⅴ、④卷六七五の道部一七八經Ⅴ、⑤卷六七六の道部一八八簡章Ⅴの五箇所があり、八養生Ⅴの項で一例引かれてはいるものの、どの内容も医学との関わりは一切感じられない。⁽¹⁹⁾それら『八素經』及び『八素真經』は方術部の八養生Ⅴ八や医Ⅴの項では引かれていないことを見ても、前記(2)～(4)のそれとは無關係の、道教の教義を説いた書であるらしい。(6)の『道藏』所収の「八素」が付された諸書について立之は、それ

らは「八素」の名が尊ばれて書名に加えられたもので、『素問』八巻に溯源する、と述べている。だが『道蔵』のそれらはいずれも医書ではない。道教において「八素」の語が非常に尊ばれていることは事実であるが、その溯源に『素問』を持ち出すことには付会の感を免れない。

続いて立之は『素問』の巻数を明らかにするため、『素問』を記録する書目などを列示し、補注を加えている。

- (1) 『漢志』……『黄帝内经』十八卷。王冰『素問』九卷『靈枢』九卷、迺其の数なり。』
- (2) 『隋書』経籍志……『黄帝素問』九卷、(注)梁八卷。
- (3) 同書……『黄帝素問』八卷、全元起注。⁽²⁰⁾
- (4) 『旧唐書』経籍志……『黄帝素問』八卷。
- (5) 『新唐書』芸文志……全元起注『黄帝素問』九卷、※立之注……全元起本は八巻であり、「九」は恐らく「八」の訛り。

(6) 晋の皇甫謐『甲乙经』序……「今『鍼经』九卷『素問』九卷、二九十八卷、即ち『内经』なり。また忘失する所有り。」※立之注……「忘」は恐らく「亡」の誤り。

(7) 『見在書目録』……『黄帝素問』十六卷、全元起注。※立之注……每一巻を分けて二巻とすることは、経文のみの本を一巻とし、経文と注文を分けて二巻とする類のものである。例えば『見在書目録』に『張仲景方』九巻とあり、『外台秘要』では張仲景『傷寒論』を二巻から十八巻に至るまで引用しているのがそれである。

要するに立之は、王冰の編次を経る以前の『素問』を九巻と記録するものもあるが、実際は八巻であったことを確認しようとしているのである。しかしそれでは(1)の『漢志』の記載はどう考えたらよいのであろうか。立之は続けて次のように述べる。

考えるに、『素問』は魏晋以来全巻本ではない。すなわち『漢志』に十八巻とあるのも、また全巻本であるか否かは

定かでない。あるいは旧目に依つてそう記録したのかもしれない。新校正は「(王氷が欠佚部を補つたことは)『周礼』に八冬官Vがないのを八考工記Vで補つたようなものだ」と述べているが、この説は当を得ている。『漢志』にはまた『周官経』六篇と記するも、欠佚があるとは言っていない。それは恐らく篇目に依つて記録したのだからであろう。恐らく『内経』もその一例である。

ここで立之は『周礼』を例にあげているが、若干補足説明をしておこう。本書は天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官の六官を立て、政治運営上の機構を詳細に説明したものである。六官は「周公が制定した官政の法」と言われてきたが、他の典籍との間で記載に不一致が見られ、それを周王朝の政治機構の記録と見なすことには早くから疑義が唱えられている。古くは『周官』と呼ばれ、『漢志』に「『周官経』六篇」とあるのがそれに当たる。しかし本書は世に出たときから完全ではなかったらしく、現在本も八冬官Vを欠き、その部分は八考工記Vとなっている。『漢志』には六篇とあるが、唐の賈公彦『周礼義疏』によれば、その六篇の中には八冬官V司空の一篇はなく、代わりに八考工記Vが入っていた。八考工記Vというのは、輪人・輿人・匠人といった工人それぞれの製品を作る過程を綿密に記録したもので、他の五官の記載とは全く趣きを異にしている。新校正は『素問』の欠佚部が王氷によって補われたことを『周礼』に準えて考えた。立之はさらに、『漢志』著録の『内経』にも、明記されてはいないが欠佚部があったと予想しているのである。

最後に立之は言う。

また思うに、「三墳」「五典」とは三皇五帝の書であり、国家の常道を説く。「八素」とは「九丘」に対して名を立てたもので、人体内部のことや陰陽・五藏の理を説く。今に伝わる『素問』八巻がそれであろう。「立之注：現行本『素問』二十四巻八十一篇は王氷が改定したもので旧次ではない。だが新校正が各篇に全元起本の巻数を記録しているので、それによって八巻本の旧態を知ることができる。」「九丘」とは天地四方の事を述べたもので、今に伝わる『山海経』がそれであろう。現行の郭璞注本十八巻は、恐らくまた九巻であったものを分けて十八巻としたのであろう。

以上が森立之「八素説」の内容である。紹介の中で既にいくつかの問題点を述べておいたが、この「八素説」をめぐる筆者が考えるところを以下にまとめることしよう。

四、「八素説」の評価と『素問』の巻数をめぐらる問題

「八素説」とは要するに、『左伝』に見える上古の遺書の一つ「八素」とは「八素」の誤りであり、今に伝わる『素問』八巻がそれに当たることを説いたものである。このことを論証するため立之は諸書から選んでさまざまな事例を示しているが、いまだに論証不足の感を抱かざるにはおれない。ここで既に述べたことも含め、「八素説」の問題点を整理すると大きく次の三点になる。

(1) 「八素」を「八素」の誤りと断定することが果たしてできるか。

(2) 「八素」が正しくは「八素」であるとしても、それを『素問』八巻と見なすことができるか。

(3) 『素問』は元来九巻であったのか、それとも八巻でしかなかったのか。

まず(1)についてであるが、前述の如く「素」と「素」とは字形や音が非常に似ているために中国古典の中で両字がしばしば誤って用いられている、との立之の指摘は当を得ている。しかし『左伝』の「八素」を「八素」の誤りとまで断定する根拠は何もなく、ただその可能性があると言えるにすぎない。(2)についても同様に、「八素(素)」を『素問』八巻と見なすに足る根拠を、立之が十分に示しているとは言い難い(「九丘」を『山海經』と見なすことも同様)。「八素」と『素問』を結びつける際に、『見在書目録』や『素問』王冰注、あるいは『太平御覽』に引く「八素」(『八素(真)經』)が問題となった。その点もやはり既述の如く、「八素」等が『左伝』の「八素(素)」及び『素問』のいずれにも等しいと見なすことは資料的に困難であり、特に『太平御覽』引用のそれは道教の教義を説いたもので、医学との関連は見出し得なかった。

従つて立之の「八素説」を全く否定し去ることはできないものの、「八素説」それ自体は確かな根拠を欠いた、現在のところ学問的には容認できない新奇な一説と言へるにすぎない。だが、その常人には思いも及ばぬ視点からのユニークな推論には、新鮮な味わいを感じる。事実、筆者は立之の所説から『素問』の来歴を考える上で一つの重要な示唆を与えられたように思う。それは(3)に示した『素問』の巻数についての疑問である。立之の説においてもこの点は明快でない。『左伝』の「八素(素)」を『素問』八巻と見る彼にとつて、『素問』は元來八巻だと考えられている筈である。しかしまた『漢志』著録の『黄帝内経』の巻数(十八巻)は欠佚を含めた旧目によるものだと述べていることは、『素問』が元來九巻であり、一巻が欠佚して八巻になったと考えているように受け取らざるを得ない。それとも彼は上古の遺書「八素」自体が既に欠佚本であったと考えているのであろうか。彼の言う「旧目」とは何を指すのが定かでない。このように立之の所説には疑問を抱かざるを得ない点が残っているのである。以下、「八素説」を離れて、『素問』の巻数をめぐむる問題を考へてみることにしたい。

唐の宝応元(七六二)年に王冰は『素問』の編次・注釈を完成したが、それ以前の『素問』には極めて謎が多い。『素問』なる書名が初めて見えるのは、通説に従えば、後漢の張仲景『傷寒論』の自序である。だがそこに巻数は記されていない。「選用素問・九卷・八十一難・陰陽大論……」とある中の「九卷」が『素問』の巻数ではないかとも思われるが、他の医書の巻数は明示されていないことから、「九卷」とは医書の名であり、今に伝わる『靈枢』(『鍼経』)にはほ相当するものと推定される。²¹⁾『素問』の巻数を明示したのは、やはり通説によれば晋の皇甫謐『甲乙経』の自序である。森立之の引用にもあった通り、皇甫謐が見た『素問』は九巻であり、同じく九巻の『鍼経』と併せて『漢志』著録の『黄帝内経』十八巻と見なした。『素問』と『黄帝内経』の結びつきもここに始まる。²²⁾

次にやはり立之が引いていた『隋書』『旧唐書』『新唐書』の芸文志(経籍志)と『見在書目録』を再び見てみよう。『隋書』には『素問』が二種類ある。一つは八巻の全元起注本、他の一つは注釈者不明(無し?)の九巻本だが、それは梁

では八巻と注記されている。全元起注本について見ると、『隋書』をはじめ『旧唐書』が八巻と記し、『宋史』芸文志や『崇文總目』⁽²³⁾でも八巻となっている。『見在書目録』に十六巻とあるのは、立之が言うように八巻本を倍化したものであろう。ところが『新唐書』は九巻と記し、『通志』⁽²⁴⁾芸文略でも九巻とされている。一体全元起注本は八巻・九巻のいずれだったのであろうか。森立之は『新唐書』の九巻を八巻の訛りだとしているが、『通史』のそれも同様なのであろうか。

ここに一つ重要な記録がある。全元起本は南宋頃には滅んでしまったらしいのであるが、北宋に王氷注本を定本として『素問』を校正した高保衡・孫奇・林億ら（新校正）が当時まだ残存していた全元起注本と王氷注本の編次の相異を記録しているのである。立之もそれを指摘しているのであるが、新校正によれば全元起注本は九巻より成り、第七巻すべてが欠佚していた。すなわち九巻である筈の全元起注本は、実質的には八巻でしかなかったのである。従って正史や他の書目における九巻と八巻との矛盾は、九巻は本来の巻数を、八巻は実際の巻数を示したものと考えれば一応納得できるように思われる。

しかし果たして単純にそう考えてよいのであろうか。全元起なる人物は隋人と伝えられるが、『南史』王僧孺伝の記事から齊・梁間の人と推察した多紀元胤の説を是とすべきであろう。その全元起が注した『素問』がもともと九巻であったとすれば、そのうちの亡佚した一巻分の残欠が隋唐時代の医書のどこかに引かれていてもよさそうなものである。管見ながら筆者はその形跡を見出し得ない。これはいたって奇異なことである。

王氷は久しく欠佚していた第七巻を先師の旧蔵より得て補入したと自序に言うが、その補入したいわゆる八運氣七篇Vの残欠らしきものも、他の医書には全く引かれておらず、そのことが八運氣七篇Vを王氷の偽作と見なす一根拠となっている。それはともかく、筆者は全元起注本『素問』とはもともと八巻でしかなかったのではないかと想像する。そしてある必要から、実際は八巻でありながら一巻（第七巻）を欠いた九巻本として流布していた（恐らく全元起以前から）のではないかと思うのである。その「ある必要」とは、『素問』を『鍼経』（『靈枢』）九巻と併せて『漢志』の『黄帝内経』十

八卷に相当させることである。皇甫謐に始まるというこの考えには、実は何ら確たる根拠はない。その疑問を筆者は既に別稿で述べておいたが、⁽²⁶⁾要するに『漢志』には『素問』や『鍼經』(あるいは『靈樞』等)の名はなく、劉向・劉歆父子の『七略』から皇甫謐に至る約二百五十年間の伝承過程は不明で、両書を『黄帝内經』と見なす根拠は巻数の一致以外にないのである。⁽²⁷⁾だがその巻数に疑問が生じた。

皇甫謐は当時『素問』九卷と『鍼經』九卷があり、また欠佚部もあると言っている。彼はもちろん全元起以前の人であるから、その『素問』は全元起注本ではない。ところで『鍼經』(『靈樞』)は九卷から成っていたことから、古くは単に『九卷』とも呼ばれていた(前述)。仮にその『九卷』が『素問』と共に『黄帝内經』から分かれたほどの密接な関係にある医書であるとすれば、同じく九卷である両書の一方だけの巻数を取って呼称とするのは余りに不自然である。皇甫謐が見た『素問』は恐らくもともと九卷ではなかったのであろう。

このあたりの事情はあくまで推測の域を出ないが、『素問』は元來九卷ではなく、『鍼經』九卷と共に『黄帝内經』十八卷に合致させるため、一卷を欠佚とした九卷本として伝えるものが、八卷本とは別にできた(それが皇甫謐によるのか、それ以前からであったかは定かでない)のだと筆者は推測する。『隋書』經籍志に全元起注本ではない『素問』を九卷とし、また注に「梁では八卷」とあるのは、その両方を言ったものと理解できよう。従って全元起は、實際は八卷の『素問』に注したのであるが、それが第七卷を欠佚した九卷本とも伝えられ、書目によって八巻とも九巻とも記されることになったのであろう。

五、おわりに

森立之の「八素説」に引きずられながら、上述の推説を筆者は提示するに至った。全元起注本が八卷であることから、立之はその八卷『素問』を『左伝』記載の「八素(素)」に結びつけて論じ、「八素説」を著わした。筆者にはそこまで推

察を遅くすることはできない。全元起本がもとも八巻であり、原『素問』も九巻ではなかったが、『漢志』の記載と合致させるために玉冰に至るまでの『素問』は主に九巻として伝えられた、と推論し得たにすぎない。だが、立之の「八素説」に触れなければ、かかる推論の機会は与えられなかったであろう。

江戸時代末期の考証学派の中では最後の、そして最も特異な人物であった森立之は、先人の業績を継承して綿密な考証を古典に施す一方、「八素説」の如き付会とも思える新奇な自説を唱えることがしばしばあった。そこに多紀元簡・元胤の如き堅実で重厚な趣は乏しいとはいえ、彼の自在な発想とユニークな推説は、その奔放な生涯と共に、読む者をして非常な興味を喚起せしめる。今回敢えてその一端を紹介し、併せて卑見を提示してみた。

稿を結ぶにあたり、『枳園叢攷』に「八素説」が収められていることを御教示下さった小曾戸洋氏に厚く御礼申し上げます。

[註]

- (1) 川瀬一馬「森立之・約子父子」(『日本書誌学之研究』、講談社、一九四三)。
- (2) 立之の伝記は注(1)の川瀬氏の論文が現在のところ最も詳しい。以下の略伝は、その川瀬論文及び森鷗外『渋江抽斎』に基づいてまとめる。
- (3) このことは特に楊守敬を通して言い得る。彼は明治十四年に来日し、一年足らずで三万巻を越える善本を集めたが、その中には森立之から購入したものが極めて多い。一九一五年に楊守敬が没すると、旧蔵書は民国政府に買い上げられ、一九四九年には台湾へ運ばれた。現在国立故宮博物院図書館に収められている観海堂蔵本がそれである。
- (4) 『素問攷注』二十卷『傷寒論攷注』三十五卷は立之の自筆稿本が国立国会図書館に収蔵。『本草經攷注』は国内に分散しているが、全十九巻の写本が台湾国立故宮博物院図書館観海堂文庫に所蔵されている。他に『靈樞攷注』『金匱要略攷注』も著わされたらしいが、散失してしまったらしく行く方が知れない。(後者の一部は杏雨書屋に所蔵)。
- (5) 全三巻。国立国会図書館所蔵。立之が折に触れて著わした小論、批評などが収録されている。
- (6) 立之は「子」の字を書き落としているが、原本にはあるため補った。

- (7) 二二二～二八四。晋の軍人、学者。『左伝』の最古の注釈書『春秋左氏経伝集解』を著わしたことで名高い。
- (8) 唐、陸徳明撰。諸経書の意義や文字の異同を採輯した書。三十卷。
- (9) 賈逵、延篤、馬融はいずれも後漢の学者で、彼らの説は孔穎達『左伝正義』に引かれている。張平子については未詳。
- (10) 『尚書』には古文と今文の別があり、古来論争が絶えない。古文『尚書』は漢の景帝のとき、魯の恭王が孔子の旧宅を壊して壁中から得たもので、先秦の蝌蚪文字で書かれているため古文と呼ばれる。東晋のとき、予章の内史梅賾が孔安国（生没年未詳）の伝という本書を献じ、それに基づいて唐の孔穎達が『尚書正義』を作った（現行本古文『尚書』）。しかし孔安国が伝えたそれは仮託による偽書と考えられている。それ故立之も孔安国の名を伏して某氏と記したのであろう。
- (11) 『其』の字は原書に「為」とあり、立之もそう書写しているが、通説に従って「其」に改めた。
- (12) 『周易』繫辭下伝、第一章に見える（章別は『周易正義』に従う）。
- (13) 同前書、第一章に見える。
- (14) 『尚書正義』には「素」を「索」に作り立之も「索」としているが、校勘記によれば宋本が「素」に作り、それを是としている。よって「素」に改めた。これも立之の言う「索」と「素」の互用の一例とならう。
- (15) 『素問』の成立をめぐる古来の諸説は、多紀元胤『医籍考』（『皇漢医学叢書』（三）（四）所収、台湾大新書局、一九六一）巻一、張心澂『偽書通考』（台湾商務印書館、一九三九）子部医家、岡西為人『宋以前医籍考』（台湾古亭書屋、一九六九）第一冊などに詳しい。
- (16) 『千金方』巻二十二、瘰疽第六の中に見える。
- (17) 『漢字の語源研究』（学燈社、一九六三）、三七二頁。
- (18) 『路史』入神農命就貨理の注「天師岐伯对黄帝云、我於尙貨季理色脈、已二世矣」。
- (19) 『太平御覧』には他に、『八素章』（巻六七七）、『八表経』（巻六七五、「表」は「素」の誤りか）、『太上八素真経』（巻六七六）なる書からの引用も見える。
- (20) 原書には「全元越」とあるが、「全元起」の錯字かと思われる。
- (21) 王叔和『脈経』巻七の八病不可刺証の第十二の一節の新校正注に「九卷」に出ず」とあり、その一節の文句が『靈枢』入逆順篇に見えることはその一証である。
- (22) 『甲乙経』が真に皇甫謐の手に成ったものかどうかは疑問もあるが、本書が梁・隋の頃に在ったことは『隋書』経籍志により

明らかである。今は皇甫謐を撰者とする通説に従っておくが、その当否は以下の推論を妨げるものではない。

(23) 宋の王堯臣らの奉勅撰。五卷、補遺一卷。原本は六十六卷であったが、南宋の鄭樵によって削減された。

(24) 南宋の鄭樵撰。二百卷。通史の例に倣い、三皇から隋に至る歴代の事跡を著わした書。

(25) 前掲『医籍考』巻一

(26) 「黄帝と医学―『黄帝内经』の成立事情をめぐって―」(『日本医史学雑誌』、二六卷四号、一九八〇)

(27) 因みに、森立之は『漢志』著録の医書に『黄帝内经』と『外経』、『扁鵲内经』と『外経』といった内・外経の別が記されていることについて、『内经』中の所説は現在の『素問』『靈枢』『明堂』の類であり、外経中の所説は『本草経』の類であるといった興味深い推論を唱えている。(『内外経』、『枳園叢攷』所収)

On the "Hasso-setsu" written by Risshi Mori

—Questioning the number of volumes of the *Su wen*—

by Toshiaki Maruyama

A short and interesting paper, the "Hasso-setsu" was written by Risshi Mori (1807-1885). He was the last and the most peculiarly individual physician of the Kōshōgaku (考証学) school, which was a bibliographical study of Chinese classics and made a sudden rise in the late Tokugawa era. In this paper he proposed that an ancient book named *Pa so* (八索) which was referred to in the *Chun chiu tsu shih chuan* (春秋左氏伝) should have been properly written as *Pa su* (八素), and that the book has been the *Su wen* (素問) of eight volumes. This reasoning is very unique but cannot be academically accepted, because there are few solid grounds to verify it.

Whether his reasoning is right or wrong, it suggested to me a solution to the ancient problem of the number of volumes of the *Su wen*. Before Wang Bing (王冰) reorganized the *Su wen* in 756 A.D., it had been transmitted in nine volumes lacking the seventh volume. My conjecture is that this book originally totaled eight volumes and had its number of volumes changed to nine to support a belief that it exists as a half of the *Huan ti nei ching* (黄帝内经).